



孔雀のボンブ

松原至大

ボンブというのは、孔雀の名、とてもきれいな孔雀でした。けれどもボンブは、ボンパスでした。ボンパスというのは高慢ちきという英語ですよ。

ボンブが、初めてこの農園に来た時は、みんなが出迎えました。みんなが——けものたちみんな、馬も、犬も、牛も、豚も羊も出迎えました。鳥たちみんな、おんどりも、めんどりも、あひるも、七面鳥も出迎えました。みんなが、仲よしになりたいと思つたのでした。

けれどもボンブは、仲よしになるうとはしませんでした。つんとすましていました。だんだんにそり返つて、ひきずつていた尾の羽根を、扇のようにひろげました。青と緑と金色に、羽根は太陽の光の中に、きらきらと輝きました。あまり見事に輝くので、一時はどのけものも、目がきらきらしました。鳥たちは、たまらなくなつて、翼の下に頭をつつこみました。

一番先に口をひらいたのは、あひるたちでした。

「クワ、クワ、お見ごと、お見ごと。」

こり合唱をしながら、ボンブのまわりを、よたよたと歩きました。

けれども孔雀のボンブは、返事もしません。

「モー、モー、ごきげんいかが。」

牛は、こういつて、ていねいに挨拶をしました。

けれども孔雀のボンブは、返事もしません。

「コツ、コツ、孔雀さんは、つんぼにちがいありません。」

親切なめんどりは、気の毒に思つて、こういいました。そしてボンブのそばへ、よつて行きました。できるだけ背のびをして、ボンブに聞えるように、羽ばたきをしました。

「コツ、コツ、遠くからいらつしやつたから、さぞおなかがおすきでしょう。なにか食べものを探しましょう。」と、大きな声でいいました。

それでもボンブは返事をしません。ボンブは、うるさいなと思つていたのでした。

「この農園のものどもは、なにをつまらないことを言うのだろう。ぼくは、王さまだ。それを、みんなにわからせてやらなければ。」

と、ボンブは思つたのでした。

そこでみんなに、一層すまして見せました。

見ごとな扇をたんで、そり返つて歩きました。その長い羽根は、王さまのおひきずりのように見えました。

「おや、私の言つたことが、お気にさわつたのでしょうか。」

と、やさしいめんどりがいいました。

「そうじやありませんよ。とにかく、あれは、かわつた鳥ですよ。」

と、ほかのものがみんなで、めんどりを慰めました。

「ほんとうに、高慢ちきな孔雀だ。」

おんどりは、いまいましそうに、こういいました。そして一日中。

「コケコツコー、ボンブ、ボンブ、ボンパスな孔雀め。」

といつて、鳴き続けました。

その孔雀に、ボンブと名のついたのは、それからなのでした。

けれどもボンブは、このおんどりにも、また農園のだれにも、言葉の一つかけようとしませんでした。毎日毎日、一日中、農園のそばの道を、氣どつて行つたり、来たりしていました。毎日毎日、一日中、自分を見にくる人たちを待つていたのでした。そこを通る人たちは、立ちどまつて、見ごとな孔雀をほめました。ボンブは、その人たちの前に扇をひろげて、その羽根を見せました。

毎日毎日、一日中、農園のけものたちと鳥たちは、いつしようけんめい働きしました。ボンブは、それにはかまわず、道を氣どつて行つたり来たりしていました。

ある日のこと、黒い雲が、空にあらわれました。下の方へ尾をひいている、妙な雲でした。時々それが、地面までたれ下りました。ボンブは、そんなことは知らずに、道ばかり見ていました。農園の人たちは、その妙な雲を見て、みんなお家へ急ぎました。

「つむじ風だ。つむじ風だ。早く地下室へはいれ。」

お母さんたちは、子供を呼びました。子供も犬も、みんな遊びをやめて、地下室へはいりました。けものたちは納屋へ、鳥たちは鳥小屋へいられました。農園の人たちは、孔雀も入れようと思いました。けれども孔雀は、はいらうとしません。

「ばかな奴だ。」

こういつて、農園の人たちは、空を見上げました。そして地下室へかけこみました。つむじ風が、近づいたのでありましょう。

農園の人たちに追い立てられたので、孔雀のポンプのごきげんが悪くなりました。胸の青緑の羽根が怒りてふるえました。

「王さまを追い立てるなんて失礼だ。」

と思つたのです。くちばしで、羽根の形をなおしてから、あたりをながめました。

「おや、今朝はみんなどこへ行つたのだろう。だれもいないぞ。」

ポンプがこう思つた時、妙な黒雲が、道の上まで、長い尾をたらしめました。と思うと、ぐるぐるごみや草や羽根を巻きこみました。ポンプのからだも、ぐるぐるまわりはじめました。なにを見ることも、聞くことも、できないのです。ちよいどもものすごい風車のようになりました。と思うひまもなく、雲は地面からはなれて、どこかへ行つてしまいました。

ポンプは、道ばたに投げ出されてしまいました。目まいがして、とてもこれが王さまとは思えませんでした。

「ああ、ひどかつた。」

こうつぶやきながら、立ち上りました。そつとあたりを見廻しました。だれもいません。

「ああ、よかつた。だれにも見られなくて。」

ポンプは、ほつとしたのです。思はず身ぶるいをする、なんだか、急にさびしくなりました。お友だちがほしくなつたのです。

「ほかのものは、みんな無事か、見に行つてやろう。」

ポンプは、初めてこう思つたのです。

農園の人たちも、けものも、鳥も、みんな一つところに集まっています。がやがやなにか言いながら、空を見上げていました。

突然お母さんのひとりが、ボンプを見つけて。

「あら、孔雀が。」

と、大きな声で言いました。

みんなの顔が、そちらへむきました。みんなの目が、まるく、まるくなりました。ボンプが、じつとみんなの前に立っていました。

さあ、みなさん、それからどうなつたとお思いですか。

ボンプは、いつもみんなにうらやましがられていましたね、ところが、今度は様子がちがうようです。

けものも、鳥も、ボンプのまわりによつてきました。ボンプは、またうるさいなと思いました。王さまのそばには、そんなに近くよつてはいけないうでしたね。ボンプは、また尾の羽根を、見ごとな扇にして、ひろげようと思いました。きらきらする頭を、また高慢ちきにあげようと思いました。

けれども、今度は思うようになりませんでした。とても工合が悪いのです。ボンプは、どうしたのかと思つて、肩越しに振りかつてながめました。ところが、びつくりして、くちばしが開いたまま、がつくりと下りました。目は恐しさで、くらくらとしました。あの尾の羽根がないのです。すばらしかつた尾が、なくなつていたのです。ただきたならしい羽根だけが、うしろに残っていました。

「もうだめですね。」

農園のお母さんのひとりが、気の毒そうにため息をつきました。すると、そばにいたお父さんが、

「そんなことはないよ。あの羽根は、来年になると、またはえるんだよ。」

と、教えました。

あのきれいだつた、ボンブのとさかは、低く低くたれさがりました。けものたちも、鳥たちも、みんなかわいそうに思つて、いろいろと話しあつています。たつた一羽、おんどりだけは、気持ちが悪さそうでした。

「コケコツコー、ボンパスな孔雀め。」

と鳴いています。

「いけませんよ。そんなことを言つては。」

親切なめんどりが、おんどりをにらみました。めんどりは、ボンブのそばに、よつて行きました。脊のびをして、ボンブにわかるように、羽ばたきをしました。

「コツ、コツ、お気の毒ですね、お気の毒ですね。」

と、ボンブに言いました。

それを聞いて、孔雀のボンブが、お返事をしました。

「ありがとうございます。」

ていねいに、小さな声で言いました。

「コツ、コツ、おなかですいたでしょう。あんなにぐるぐるまわつては。食べものを、見つけてきましょう。めんどりが、親切に言いました。

「どうも、すみません。」

また孔雀のボンブが、お返事をしました。とてもていねいに、お返事をしましたよ。

(エスタレ・グリネーカー・ホール女史の作による)